

ヨーロッパ社会の成立基盤

— 魂への配慮・宗教的精神の重要性について —

宮 坂 万 喜 弘*

キーワード: 古代ギリシャの奴隷制民主主義, アレキサンダーとヘレニズム時代, ローマ国家の成立, ローマ帝国とキリスト教, ヨーロッパ中世都市と市民勢力, アルプス山脈の南北の都市の性格, ルネッサンスと宗教改革 - 信仰と知性, 絶対王政と重商主義, スペイン, イギリスとフランス革命, ドイツと日本, 終りに

はじめに

ヨーロッパではいわゆる近代資本主義社会の形成の下で民主主義的国家が生み出されたといわれる。今日このヨーロッパ諸国も少子高齢化社会であり、我が国と同じような方向であることを筆者はこれまでの連続論考で報告してきた。洋の東西を問わず、共同体社会構成員である一般市民は、家族のため生業を営み、国家に税を払い、共同社会に貢献しなくてはならない。その後市民たちは、人生の最後に高齢者となり弱者となる。まじめに生きた大多数の人々を、ヨーロッパ共同体の行政府と一般市民たちは懸命に支えていた。ヨーロッパの国々を実地に訪問し、実情視察を行なってきて強く感じたのは、社会共同体を形成する人々の生活基盤の心構えに、同質な同じ方向を目指す意識と精神性の固い市民同志の絆の姿勢であった。そこにヨーロッパ社会の際立った特徴が示されていると思われた。

ところが我が国の状況は、弱者となった高齢者に対する行政府の政策対応の遅れがはなはだしく、また社会を構成する市民の側の連携意識が、ヨーロッパの国々の状況とまるで違う。なぜなのかとの強い疑問の念から、その点を明確に納得したいと考え、今回はこれまで少子高齢化社会について連続論考してきたものの最後のまとめとし

て、この論考を書くことにした。

なぜこうも異なっているのだろうか、との思いが強かった。マックス・ウエーバーの『社会学方法論』、『都市の研究』、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』やトレルチの『ルネッサンスと宗教改革』などの論述の膨大な規模の歴史・経済・宗教などの文化的研究論述がこの鍵を握っているとおもわれる。ヨーロッパ歴史に根差す知恵と風俗習慣、それに宗教的価値観の違いを学生時代に学んだ。ヨーロッパ社会経済史専門家、一橋大学の増田四朗氏の『西洋中世世界の成立』、『ヨーロッパとは何か』を以前に読んだ。今回のこの論文のための中心はここにあると思った。その手引きが2007年第5刷出版の優れた著作『都市』に集約されていることを知った。『都市』はマックス・ウエーバーやトレルチの理論に立って見事にヨーロッパの社会の成立基盤を、そして歴史の重さを解かりやすく、記述したものであった。改めて日本とは違う歴史の重さと姿に出会うきっかけになったといっても過言ではない。今回の稿はこれまでの歩みをまとめるものとして、ヨーロッパ社会の成立基盤を『都市』に沿って整理することにした。これが契機になり、マックス・ウエーバーやトレルチの著作をもう一度省みることもなった。ヨーロッパはヘレニズム（ギリシャ的な要素）とヘブライズム（砂漠の文化）普遍的価値観（神）を支柱として文化が構成され、国家共同体が共生意識を分かち合って成立してきているとよく言われる。市民としての個人一人ひとり

2010年11月27日受付

* 江戸川大学マス・コミュニケーション学科教授

の意識は、自他共に自律的に確立され、責務と道理をわきまえ、個人主義的自立心を堅持しつつ、昔からの伝統的仕来りに沿った共同体としての社会生活の営みが、整然と行われていた。高度に組織化された社会連帯意識は神を共通の価値基準として協調的に調和し、同方向に向かって進む共同社会であった。⁽¹⁾

戦後のわが国に占領軍の教育は民主主義の社会を教えたという。ヨーロッパとどこがどう違うか。これまでの高齢者に対応する視察の最後として、ヨーロッパの歴史と習慣や生き方、近代社会成立の基盤経過を見て検討したい。ヨーロッパの大多数の人々の心の底に何が前提となって民主主義は成立したというのだろうか。そこに見えてくるものとは、自己の欲望を控え、責任と義務を神に対して果たそうとする、地域ぐるみの厳しく謙虚な心構えの“魂に対する配慮“つまり”宗教的な次元“にあると思った。そのことをこの論文では述べる予定である。

この論文は以下の順に論述される。

第1章 民主社会成立までの歴史的概観

- 1) 西洋文化歴史の基盤
- 2) アレキサンダーとヘレニズム時代
- 3) 市民意識の変更とローマ国家成立
- 4) ローマ帝国
- 5) ヨーロッパ中世都市
- 6) 10世紀頃から14世紀頃の西洋中世都市の活動
- 7) 中世都市の性格の変化とその精神
- 8) 近世の革新的運動の意味について
- 9) 近世—信仰と知性・魂の中に自分を律する基準

第2章 近代ヨーロッパ社会への歩み

- 1) 近代社会の成立—絶対王政と重商主義そして資本主義社会へ—
- 2) イギリスの躍進とアメリカ独立、フランス革命
- 3) 遅れた近代化社会の実現の姿
- 4) ヨーロッパ社会に見る精神的伝統基盤—魂

の善導と禁欲

まとめ

第1章 民主社会成立までの歴史的概観

1) 西洋文化の歴史基盤—古代ギリシャ都市— 古代都市国家の奴隷制民主主義

西洋史には、ギリシャの都市国家の発展と民主主義政治の活動が明記されている。この古い時代の都市の市民とは、原則として土地の所有者としての地主であり、同時に武器を取って自らが共同社会を守る責任と使命を身に負う特権階級であった。農村で農地を持つ地主が耕地を従属住民や奴隷に任せ、自分は地主の形で都市の中に住む。この地主たちの共同防衛設備を備えた都市国家がポリスであり、この都市内部は極端に消費者（特権階級）住民が居住した。その特徴は、土地所有農民と商工業者が集中的に市民団として居住する地域で、生計を立てながら国家の防衛力となって自らが戦い、外交問題を考え、敵対する都市間の問題がおこる場合はその進路を自ら決め、国家反逆罪についても自分たちで判断を下す、こうした全人的能力を自からに課することが、自己自身の存在と共同体社会維持の条件でもあった。このような人々の市民団によって、(アテネもスパルタも)、恐ろしくデモクラティックな主知主義的普遍主義的な生活が展開され、それは奴隷制度の上に立つ非常に特殊な消費者階級の住む特権都市であった。完全な市民権の所有者は働く必要がなく、食べることに何の心配も持っていなかった。つまり消費のみがなされる都市で、その住民の理想は経済活動をするのではないし、金をためることもなかった。そうではなく彼ら市民の関心はまず体を鍛え、芸術を論じ、哲学から、自然科学、一切の学問知識を身につけることであった。あらゆる領域の事柄に関心を持ち、知的に物事の本質を見極める性格を持って几帳面なほど知識を体系化していった。この都市に住む自由民たちは、自然の脅威や巨大な権力を持つ絶対王権支配の難儀さの体験を知らぬ民であったといえる。

ここから得た世界観と現実のポリスの生活を、

矛盾なく一つの原理で感じ取ろうとした政治の思想こそ、究極のギリシャ人の理想、いわゆるプラトンの代表的な理想国家論における哲人政治の理論であった。政治は生々しい人間の権力争いのためのものでなく、最も理想的な形で哲人が行ない、人間生活の本質との関係性を伴った政治的実践の学問として学ぶ価値があるものだと言われた。理想的政治としてプラトンの国家論やアリストテレスの政治学の理念・理論はヨーロッパでは現代でも、伝統的政治学の思想として欠かさず議論されている。

ところでこの理想が語られた都市の規模（大きさ）を、わかりやすくするため例を日本の地域にとってみれば、せいぜい日本の中世近世の武蔵国や相模国くらいの地域で、BC5世紀頃のアテネでは、2万5千～3万の市民権を持ち、その家族あわせて自由民約9万人で、在留外国人（主として商人）が1万人、奴隷が3～4万人、占めて14～5万人の規模の都市が、国家として防衛と覇権の争いを繰り返す状況であった。

スパルタでは前5世紀頃、市民権を持った男子わずか4～5千人とその家族あわせて1万5千足らずの自由民、これに比してポリスの政治に参加できない従属民がおおよそ5万、奴隷14万から時代により20万人、自由人は国家総人口の1割しかおらなかった。4世紀頃になるとさらに自由人の人口は減って市民権を完全に持っている者は2千名あまりで、二十数万の都市国家を牛耳っていた。⁽²⁾

確かにこの社会制度は徹底した奴隷制度で、特権階級だけが、政治に参加することの意味を学び、市民権の認識を教育され、社会意識を自覚しているのであるから、近世の西洋市民の考えを生み出した民主主義的観点とは、まるで異なったものであるといえる。

とはいえ現代にいたるまで西洋人の社会生活への意識中に、この古代ギリシャの、国家を支える独立した市民の責任と自負の精神（特権階級の市民意識の考え方）が、尊敬され、規範となり、理想と考えられ、社会の思想活動の中に深い根を下ろしていることは、極めて重大なこととして明記

すべきことである。

つまり、あたかも古代アテネの市民の文化意識が、地中海地域に姉妹都市のポリスを代表した如く、近代世界の歴史において、ヨーロッパを中心とした合理的行動の基準が、世界基準となって近代以後のヨーロッパ以外の植民地であった地域社会に影響を及ぼし、古代アテネやスパルタの都市の市民と同じように、ヨーロッパ的基準が世界的な指導権を構築していくのだと考えれば、独立した市民の責任と自負の精神が、社会や国家を支えるものとなる彼らの基準を、他の文化や伝統の世界に対する範として掲げ、示されるものとなっているのかと考えられる。西洋民主主義社会の理念が尊ばれ、市民の人権が尊重され、それを高く自覚して実践しているヨーロッパの人々の姿の根底には、古代ギリシャに通じる市民意識がヨーロッパの伝統となつてあると感じても、さほど異様なことではないと思われる。

2) アレキサンダーとヘレニズム時代

さてアレキサンダー大王が出現する頃には、この貴族的伝統を受けたギリシャのポリス国家どうしの紛争が激しくなり、社会に分裂状況が起こる。すなわちこれまでの民族的伝統の束縛が、時代の流れの中で変化を余儀なくされ、新興商人や氏素性のわからない者が経済力を蓄え、有力者となつて行くと、古い良い時代は自由主義の経済力を謳歌する勢力に取って代わられ、これまでのギリシャのポリスの枠組みは変化してゆく。さらに世界的ペルシャ帝国の影響と、東方からの東洋宗教思想の到来で、コスモポリタンの、世界主義的、個人主義的人間観が生じることになった。ヘレニズム世界帝国にいたって、国家はコスモポリスに変わり、これまでのギリシャ世界、ことにポリスの代表的中心都市アテネでは、極端な個人主義が幅を利かせるようになった。⁽³⁾

アテネを中心とするソフィストの活躍の中で、それまでの伝統的政治に期待する意識はうせて、指導的階層であった特権市民の意識は、魂の安静を求める境地へと移行していった。彼らは懐疑的な人間観を抱くこととなった。プロタゴラスを代

表者とするソフィストの活動から、ローマ時代に至って伝えられてきているストア哲学の世界主義的思想にいたるまで、この時代の混沌とした状況や有様が反映されているといえよう。個人主義的、また懐疑的思想がこの時代の人々に大きな影響を残した。こうして本来のギリシャ的世界観は変化して行った。

ソクラテス、プラトンの自由市民の教養についての思想の流れは、アリストテレスに引き継がれた。この三人の思想は当時のギリシャの時代の人々の心の変化を示し、アレキサンダー大王の家庭教師であったアリストテレスの考えることは、ヘレニズム（コスモポリタニズム）に向けて社会が具体的に変革することへの準備過程を、思想的に示すものであったことが見てとれるのである。

ローマの国家形成の頃の市民の生活の姿に、近世以降の西洋の宗教的、経済的、倫理的性格を持つ人間像が生まれ出る萌芽が見られることになる。

3) 市民意識の変更とローマ国家成立

古代ローマ都市国家の成立はギリシャとほぼ同じく、農民であり戦士でもある者たちが都市に集住したことに遡る。しかし古代ローマでは、特に共和政中期すなわち第2次ポエニ戦争終結頃まで、ギリシャに比べて集住が徹底されず、「地主＝戦士＝家長」は家族や少数の奴隷と共に農作業に日常的に従事するのであって、作業の合間や農閑期にのみ都市に集まって元老院や市民集会での議論に参加するに過ぎなかった。その結果として、国家の公生活に向かっている面と、それから国家の干渉の及ばない私生活の面とを自分の生活の中でわけるローマ人の性格が形成された。生産における奴隷労働の比重が増すのは、第2次ポエニ戦争に勝利することによって地中海交易の利権を独占し、安価な穀物と大量の奴隷がローマに流入して以降のことであった。

他方でローマ社会では外敵への防衛や外部に発展のために、軍備が必要であると考えられた。それゆえ、軍事力と法律が彼らの発展の基盤となった。後にローマはカエサル、アウグストゥスを経て帝政へと移行し、それを機に社会内容は初期と

はさらに異なったものとなっていった。

しかし理想の一原則で自分の行為を律するギリシャの社会と違って、初期ローマ社会は、常に自分より強い外敵との対立緊張の中で戦い続けるもので、その場その場で生ずる変容に、臨機応変なる対処行動を実践する社会でもあった。

こうした初期建国の都市時代のローマでは民族的な家柄の者は、都市の中心の貴族支配階級として元老院を構成し、都市郊外に一定の土地を持ち、自由民が国家の役人となり、少し有力な者は元老院の一員にもなった。

その後のローマ帝国では異なるが、最初の頃の都市ローマは、王権の役割を政務官（役人）、元老院（地方貴族階級出身者代表）、民会（民衆の代表者）の3者が分担し、定められた権限に基づき国政に参加し、運営した。国家の理想として3者の機能が互いにバランスをとって調和状態にあることが唱えられたのである。物事を機能的に捉えるローマ法が、この考え方の意味をよく現わしている。都市国家の場合、法は国家と個人、個人と個人の権利をうまく規制し、国家と個人、個人と個人が各権利を持って相互のバランスを多元的に規制するものであった。ギリシャのごとく具体的に、国家の本質はこうだというのではなく、現実のそこにバランスが均衡している場合にだけ、国家がうまく運営されていく。したがって権利を持つ者同士の関係概念、その関係の集積が法なので、個人生活の公的関係だけが共和政の構成部分をなし、私的な部分は国家の関与しない面である。

さらにローマが発展すると、都市ローマを中心にイタリア半島の都市国家が、個別でローマと関係を持ち条約をも結んだ。この条約の取り決めの結果、地方の征服された従属都市国家が、首都となるローマとの契約により、首都ローマの政務官職の選挙権を持ち、軍事的協力義務を負うのであった。各都市市民がそれぞれ個別の関係の契約内容を負って、ローマとつながっていった。ゆえに被征服都市同士が、連携してローマに対抗することは出来ないことになっていた。さらに軍人が植民者（完全ローマ市民の身分）として都市を建設

して移住し、反乱に目を光らせた。こうした取り決めの結果、ローマは支配を拡大していった。しかしそれは領土的にイタリアを支配したのでは毛頭なかった。

これに対して、カルタゴとの3度にわたるポエニ戦争に勝利した結果、ローマはイタリア半島から離れ、海外に勢力を拡大した。しかし海外では都市国家そのものが存在しない地域も多く、都市国家との個別の条約による支配という形態が通用しなかった。そこで導入された新たな支配形態が属州であった。属州を治める役人（属州長官・執行官・総督）は、年貢物資を徴収し、本国のローマに租税を納めることになっていた。後にこの地位を利用して経済力を貯え、私的にローマ市民を徴用して軍隊を組織する者が登場した。これにより従来の地主的戦士市民の原理は失われ、ローマは混乱時代に入る。属州を治める役人は自分の指揮する軍隊を伴ってイタリア本国に入ってはならないことになっていたが、彼らはこの掟を破って権力を掌握するようになった。ルビコン川を渡ったユリウス・カエサルもその一人である。アウグストゥスから始まるローマ帝国は、初期にはローマ市民と属州民との混合軍を編成して国境を防衛したが、次第に旧来の市民達は軍隊に入ることを嫌うようになり、かくして国家成立の基盤としての市民意識は失われ変化していった。最終的にはゲルマン人を傭兵に国境を守ることになり、その隊長の一人によって西ローマ帝国は滅ぼされるに至った。

4) ローマ帝国—キリスト教公認（ローマ都市の変容）

はじめは、征服した地方都市連合の拡大によって、各都市の守護神を祀り、共通に統一する必要もあって、ギリシャ神話の体系をローマ神話の世界へと翻訳して行った。世情がローマ帝政期のコスモポリタンの状況になった時、個人主義的・普遍的（世界主義的）思想であるキリスト教が流布され、その教えはこれまでの各地の伝統的な多くの宗教との長期間の戦いと紆余曲折の後、多神教を凌駕し、テオドシウス帝の時、AD392年一神

論キリスト教がローマの国教とされた。このキリスト教が中世に入るとローマ教皇のもとにヨーロッパ大衆の共通原理となり、その後北欧近世社会の成立に至り、宗教改革を経て神（普遍）と自覚的個人（有限）の単位で生活する民主主義社会成立の基盤へと連なることになる。

5) ヨーロッパ中世都市—封建領主の支配と中世市民（手工業者並びに商人）勢力の出現

旧来の社会の生産基盤の上に成立した中世的社会が行き詰って、各地に新たな生氣が沸き起こり、労働の価値が、ローマ教皇中心のキリスト教信仰に裏付けられることになった。神の前に皆が平等であり、自由であり、労働が正しい信仰の前提である、というモラルが語られたことは、以前の価値基盤であった氏族制度に基づく、古い社会構造を根底から覆していく。この結果、10世紀中ごろから共同体意識と主従関係によって再構築された封建制社会が、国家意識へと構築され、その中からさらに市民が中世市民階級として、新しい中世の社会を形成していくことになる。

11世紀末から12世紀頃にかけて商人集落から商人ギルドが形成され、自治都市制の確立に貢献する。封建領主が握る領主法の支配する地域と、独立の都市法を持つ都市市民の生活の間に、これまでと違った経済的な関係が成立していった。古代とは異なる原理に基づいて市民自らが商業を営み、13世紀から14世紀には諸手工業者や小商人達もギルドを結成し、フランドル地方や西部ドイツ、北イタリアなどでそれまで大商人の独占であった市政への参加を実現させた。土地を持たない個人的民衆の活動による社会の出現である。それは一方で親方を中心とする封建的な性格を持ち、厳密に手がたく生産に励む技術職人集団であるギルドの市民と、他方で出来るだけ遠くの市場と結びついて、最高の利益を上げることを思考した商人組合的集団である市民の経済力の台頭であった。

彼らは封建的でありながら、開放的である両面の性質を抱える新種の気性を備えた市民であった。商人は農村（原料供給地）と他国の市場（自

国商品の販売と他国商品の購入)の関係を拡大し、輸送により交易地域に活動展開させることを図った。この図式が後に植民地政策としての原料供給地獲得と製品販売活動を世界展開する活動原型となった。

教会堂と市庁舎と市場広場を中心に軍事的、精神的、経済的機能が集約され機能する、城郭で囲まれた街と、城壁門の郊外に広がる畑地が西洋中世都市の特徴的な姿であった。こうした都市と農村の関係は、ヨーロッパの北に行けば行くほど政治的に明らかとなった。農村は封建領主が支配権を握り、都市は市民が自治権を握るという、政治的な区別が生み出されていった。

6) 10世紀頃から14世紀頃の西洋中世都市の活動—アルプス山脈以南と以北の社会の相違

古代世界が没落してから中世都市が発生する11世紀頃まで、ゲルマンの民族移動の結果として成立した部族国家、封建国家の長い歴史があった。その国家観とはローマ帝国の思想と、ゲルマンの農業中心に血統を尊重する士族的、部族的、集団の思潮、主従の考え、キリスト教思想などが入り混じった、土地支配中心の国家観であった。しかし14世紀から16世紀のヨーロッパ社会の転換期に起きたルネッサンス(文芸復興)の文化運動によって、古代ギリシャやローマの国家思想が復活し、もう一度市民政治や国家法制、国家観などが再生する機運が生じた。この結果、西洋中世都市では、古代国家思想と、中世時代の国家観ルネッサンスの推進運動が合一し、近代国家の原理を作った。そこで中世社会の重きをなした活動力の中心は、古代国家の消費を主にした階層の独壇場ではなく、商工業に直接従事する市民集団の経済的行動力であった。「ホモ・エコノミクス」⁽⁴⁾と呼ばれる人の類型が小規模だが都市の内部に発生した。このことは以前とはまるで違った社会構造を予想しなくてはならない事柄であった。

しかし中世ヨーロッパ社会のこの図式は、広いヨーロッパ全域に共通していたのではない。この図式はアルプスを挟んで南北地域で異なっていた。

(1) アルプス山脈以南の社会

イタリア中世都市は貨幣経済普及の中で、伝統的な大都市周辺の封建領主たちと、旧勢力の貴族階級とが結びついた、土地貴族が市民化して市政を握った。新しい市民活動を呼び覚ますかに見えたルネッサンス運動も、結局旧勢力の貴族階級と結びついての、特殊な才能を發揮した一部の文化的運動として終焉する運命であった。⁽⁵⁾ イタリア中世都市は、アルプス以北の国の市民的自覚を伴った市民都市の性格と比べて、封建貴族と合体した不純な市民都市であって、古代以来の旧ローマ帝国の伝統が強かった。

(2) アルプス山脈以北の社会

アルプス以北のルネッサンス運動の影響はフランス、ドイツ、ネーデルランド(現オランダ)、イギリスなどの北ヨーロッパ地域の文化的伝統と社会的状況と結びつき、独自のルネッサンス文化の果実をもたらすことになった。その特徴の一つは聖書の研究を通じて信仰の内容を問いかけたことであった。これは宗教改革へと連なることになった。

ライン川の西側やドナウ川の西と南側地域は確かにローマ旧帝国領地である。しかし時代の推移の中での民族移動により、その影響はほとんどなくなった。11世紀以来アルプス以北の地域には、イタリアとは異なった新たな共同体が成立していた。すなわち11世紀に、商人階級が封建領主たちの勢力との駆け引きのすえ、市民による都市運営の権利を獲得し、自治的に運営される都市の構築を暫時確立していった。

たとえば商業都市として、最も活発に活動していた地域は、ラインの下流域のケルン、デュッセルドルフやリュウベック、オランダや、北フランスやベルギーの都市、西北ドイツ、イギリス南部などの地域であった。中世社会の変貌が、商人の創造力の結果特定の地域を生み出した。ライン川の下流に基地を作ったドイツ商人たちが、東に住

んでいたスラブ人を押しつけて、エルベ川東に植民地を構築した。現在統一された、以前の東ドイツ地域（低地ドイツ）での都市の形成は、今日の学説ではヨーロッパ大陸のドイツ地域に外敵が何度にも及んで迫った時代に、ドイツ皇帝オットー（神聖ローマ帝国皇帝 912～973）が軍事力によってこれを断固阻止し、東方への砦をここに築き、そこで神聖ローマ帝国の基盤が確実なものとなり、ドイツの平和が確保されたとされている。この頃になると、北方の野蛮で名をはせたバイキングの末裔、ノルマン民族、（デンマーク人、スウェーデン人、ノルウェー人）も、略奪のための侵入をやめ、キリスト教化し、平和的に商業をいとなむ民族になっていった。この平和の持続される中で、特定根拠地を持たずに遍歴していた商人たちが、商業に都合のよい地区へと定着するようになった。⁽⁶⁾

この結果、旧来の封建領主たちは、新たな社会勢力となった商人たちの富を、自分の利益に組み込む算段に出たのだが、商人たちは皇帝領の特権を主張し、皇帝直属理論でこれを排除した。商人たちは交通の便のよい地域（例えばライン川流域、ハンザ同盟都市：発祥中心都市リュウベック：1159年～30年戦争による領邦国家成立により1669年終焉）に商人ギルドの仲間内から選んだ役人を立て、皇帝任命の形式を図り、その下に租税の納入をはかって皇帝の保護下に自らを置いた。しかしこの地域の皇帝の支配力は名ばかりで、自治を掲げて都市運営を目指した商人や、生産物を手掛けた職人ギルドの団体の手に、自治統制的な政治運営が任される場合が多かった。そのため旧来の伝統を持たない社会勢力の者たちの運営が、行われるようになったのだった。

つまり市民の同じ立場で、商人や手工業者が自主運営を行なう行政地域が、封建体制の中で出現したのである。やがてこの活動が充実し、都市が豊かになると、またもや封建諸侯は経済的な富に目をつけ、これを搾取しようとした。ここで商人や手工業者市民は、今度は宗教的な勢力と手を結ぶことになった。すなわちカトリック教会の司教や大司教が保護を請け負う勢力としてあらわれ

た。商人たちの特権を確保し、維持するため封建領主に対抗するべく、ローマ教皇の叙任権を持って領主の地位決定に関与した。こうして商人と大司教・司教たちの間に互に相手を利用する図式が生じた。ところがここにドイツの神聖ローマ帝国皇帝とローマ教皇が叙任権で衝突し、争う状況が起こった。カトリック教会の司教や大司教はローマ教皇の味方をし、封建領主たちもこの争いに乗じて皇帝から離反した。封建領主の司教や大司教は都市に財政的負担を命じた。それは大きな負担となった。ここで都市の市民（商人・手工業者）は神聖ローマ皇帝の下に自由自治の都市運営を認められていたはずであると、一致団結して暴動を起こし、領主たちを都市外へと追放した。ここで初めて市民たちの運営になる都市社会が国王（皇帝）に直属するものであるとの考えが広がり、この国王直属の都市としての状況を守るための法理論根拠を確立する運動がおこる。1073年のウォルムス市民の反抗、1074年のケルンの大暴動や北フランスから低地地帯の多数の箇所で騒動が起こったのだった。⁽⁷⁾

こうして都市の住民の特権が、時間をかけながら不動なものとなって行き、封建諸侯の支配力を弱め、都市の住民が、自分たちで自分を守ることが出来ることを自覚しつつ、相手にも認めさせる特権獲得の努力がされたのだった。

都市が城壁を築く防備権、防壁築城権、軍隊を持つ権利、これらの経費は市民が負担すること、市運営役人の選考権、下級裁判行政行使権（治安維持権）、貨幣鑄造権、市税徴収権、度量衡監督権、その他の諸権利獲得は皇帝から都市住民達に付与され、11世紀末から13世紀にかけて都市住民全体での誓約結成をした。共同の市壁中で生活する15歳以上の男性の仕事は異なれ、なんら特権的な階層に属さず、平等な市民の立場で誓約をなし、共同体に参加した。⁽⁸⁾ 彼らは利権・習慣に全く関係なく、平等に共同体のための相互責任を果たす誓約をした。市の政治運営を団体行動で勝ち得た都市法が、市民の権利を保障する法律として出来、基盤となった。これは自分たちの生存と利益を脅かす、封建領主や外国勢力に太刀打ちし、自

衛と自己自助の精神に基づく、自己以外の誰にも頼らない、質の高い“共通の市民精神の相互連帯意識”の確立に役立った。共同体維持を相互使命と自覚した者同志の約束の下に実行する。これがデモクラシーの基礎となった。この気迫に満ちた共同体維持意識が中世からの伝統と誠実、団体の秩序の中で家族主義的ギルドの活動として都市の一面を形成していった。

7) 中世都市の性格の変化とその精神

(1) イタリアの都市の場合

中世都市の経済的背景、中世市民の精神は、外部にあっては商業的野心、取引相手との駆け引き知略、また広く未知な地域の産物の発見、流通の実現のための冒険心と勇気などが特徴なのだが、反面内部では、伝統と誠実、秩序と慣習などに縛られていた。手工業者の多くは外界での商取引の取引に従事するのではなく、むしろ都市内部で日々生業を営み、家族主義的な親方、徒弟、職人の組織が整い、厳重な監督管理の下で生産される製品が検査され、社会に提供されていた。この位階制度の階層は伝統と誠実さ、団体の秩序の中で受け継がれ、外界に向かって開かれている商人の性格とは反対に、職人市民の性質は保守的側面をもつものであった。

こうして商取引人が仲介者となり、ヨーロッパの商品をアジアの国へ、またアジアの品物をヨーロッパに運搬し、莫大なる富を生み蓄積していった。アルプスより南の地域のイタリアの都市商人の活動が、近隣地域から次第に地中海の遠隔地域へと拡大し、アンテオキア、コンスタンチノーブル、アレクサンドリア、西方はフランダース地方やサザンプトンにまで船で出かけて行った。これは独占的特権的な、海運の冒険的活動の下での商業であり、不安定である反面、それだからこそ莫大な利潤の生まれうる活動であった。フィレンツェの毛織物の産物が、投機的なもくろみのもとで、外国に輸出されることによって、原初的蓄積の前近代的資本の形成が行われ、巨大な工業資本が形成された。この結果メジチ家は商人から生じ

た財閥として、その市政を牛耳る権力者となったが、さらにローマ教皇や外国の君主や領主に金を貸す、高利貸となった。そのほかにも有名な証人としてペルッチィ、バルディ家などの商人らの名があげられる。

イタリア商人の商取引は、のるかそるかの冒険的商売活動が、高級品という名目の異国からの商品を、貴族や領主、特にローマ教会関係の貴族たちにもたらし、貨幣経済の普及と共に、庶民の生活とはほど遠い商品(贅沢品)として、利潤をもたらした。特権階級の階層の生活はますます華美になり、貴族の欲望を満たすため、租税の取り立てにより庶民の生活は一層惨めな生活を余儀なくされていった。この悪循環の一翼をイタリアの商人が担っていたのだった。

14世紀以後イタリア資本は、商品取引資本の両替資本と高利貸資本の形で、自国の大衆から離れて、ほかの国の王侯貴族の贅沢のために金を貸す国際的商業資本となり、財閥を作ることになった。それに比して北欧の都市資本は、小規模の両替や高利貸資本はあるものの、同時に産業を動かし、産業につながっている性格がある。つまり問屋が材料を手工業者に渡し、賃金を払って製品を作り、その製品を販売する商業資本であった。

(2) 北欧の地域の場合

北欧の都市はイタリアのような財閥は現れない。北の地域の商人に見る商業活動の実態は、独占的な豪奢品ではなかった。彼らは小財閥であって、イタリアのメジチ家のような政治的権力を手に入れ、欺瞞の限りを尽くす不誠実な名誉欲での活動はしなかった。南北地域の商人の質の差がここにある。13～14世紀のこうした商業の発達は、やがてハンザ商人の活動範囲として、北海の沿岸からイングランドを相互に結び、ライン川下流を基地とした料金価格体系を成立させた。14世紀頃には、職人がイングランドへ移住することもあった。12世紀頃には、フランドル(ベルギー)のブーリュウジュは織物工業が盛んとなり、14世紀頃の商業圏の中心地となっている。

農村にあった副業的な家内工業が都市に集中し、生産力を急速に高めた結果、ここに一つの産業革命がおこった。すなわちイギリスで生み出された羊毛は、フランドルに原料とされ、外国で織られた製品を、もう一度輸入するという不利な状態になった。イギリスはこれを乗り越えて、自国の原料で自国の織物業を起こすようになった。これが14世紀の百年戦争半ば(1350～1360年代)の頃、毛織物が英国国内産業となるきっかけであった。⁽⁹⁾

そしてイギリスが本格的に自国内で産物の原料を製品化し、外国に輸出するのは、30年戦争(1418年から1448年)頃からのことであった。これにより1350年から始まった毛織物業が1460年イギリスの国産化産業になった。30年戦争を境に以前からの北欧商業活動の形態が転換されることになり、フランドルの職人がイギリスに移住、イギリスのロンドンや中部イングランドに、フランドルの毛織物技術を移植し、英国は急速に国内産業で、軍隊の軍服を特殊需要に充てることができた。この技術革新がやがて、イギリスの近代化の基軸となっていった。

北の地域のハンザの商品は、生産地が比較的近く、生産の仕組みも客観的に眼前で見える形で発展して行き、日常必需品を一般市民が日々消費するものとなった。その値段は庶民の生活のための購買範囲で、農村の自給自足的な経済圏での商業取引の限度内であった。工場生産の親方たちは政治権力を握るようなことは考えなかった。誠実さと贅沢に走らず、節度ある生活態度を終生忘れることはなかった。

アルプス以南の地域の歴史的経済的状况とは違い、アルプス以北の社会基盤に見られた近代市民社会成立に向かう条件は、市民の独立した精神と、合理的な誠実さに基づく産業資本や商業資本の蓄積と活動が、長い年月の市民生活を通じて実現され、共同体に対して市民達が主導権を握ることができた。

8) 近世の革新的運動の意味について

(1) ルネッサンス

さて近世の時代開始のきっかけは、イタリアの文芸復興(ルネッサンス)とそれに続いて起こった北欧の宗教改革(ルター・カルビン)の二つの動きであった。しかしこの運動は全く反対の内容を目指すものである。文芸復興は外面で展開される人間の活動への肯定であり、宗教から離れて人間中心の方向に向かう活動であった。

イタリアルネッサンスでの、人文主義社会の知識と信仰統一の問題は、解決されないまま、世俗生活の活動に力点が置かれることになった。イタリアに花咲いたルネッサンスは、宗教を離れた個人の孤独の中にみじめにも終焉した。レオナルド・ダヴィンチは晩年行く先もなく他国をさまよい、政治理論の著名人マキアベリはイタリアの山の中で孤独のうちに生涯を終わる。イタリアの社会のルネッサンスの結末がいたるところで人間同士が暗殺毒殺を繰り返した、争いの歴史に集約されているように思われる。⁽¹⁰⁾

(2) 宗教改革 一健全な中産階級の経済活動を活発にする原動力

これに対して、宗教改革はカトリック教腐敗の構造を問い、教会制度の形式主義と権威主義に反対し、文化の否定と聖書の言葉への帰還を中心課題とする。それは人間の現在を見据え、永遠の神の前で人間の原罪への深い反省と、神の言葉だけに実質的意味を見出し、個人の良心内部に沈潜して行くものであった。個人的な心中での反省と、日常の倫理的な生活の実践による禁欲的な暮らしの継続は、健全な中産階級の経済活動を活発にする原動力となった。こうして北欧のライン川下流からイングランドにかけて活動した市民の堅実な生活態度から、近代社会経済は発展していった。この点、近代市民社会の民衆の力の源泉には、外的権威によるのではなく、自分の心の中に生活を律する神との対話が語られ、瞬時も神から離れずに無駄なく働く民衆の生活の中で、信教の教えはますます容易に受け止められ、広がっていった。「民衆の個人と社会に対する精神的状況にルター、カ

ルビンの宗教改革が受け入れられる素地があり、初めて宗教改革は成功裏に拡大し、旧勢力であったカトリック教会の権威をはねのけて、新しい信教の教えが社会の根源的指導理念となった。自己生活を誠実に一瞬の積み重ねの連続として神の前で営み、合理的に整頓して行く努力こそ、最大に資本主義を生み出すきっかけとなった精神である。」⁽¹¹⁾とウェーバーは指摘している。とはいえこの際、はっきりと認識しておかなくてはならないことがある。それはこうした行動の根幹を形成した動機についてである。貨幣の獲得を義務づけられた天職とみなす思考は、教会と政治に密接に結びついたイタリア諸都市の金融勢力の利害への迎合が見られる場合でさえ、営利自体を目的としての行為は、根本的には教会の教理に沿わない恥ずべきこと、社会秩序が止むを得ずにそれを黙認しているに過ぎない、との感覚は消えてはいなかった。当時の支配的学説の意向では、資本主義的「営利」の精神は、醜いこととして排斥されるか、少なくとも倫理上積極的評価が与えられるものではなかった。

ここでマックス・ウェーバーは新たな精神のことについて述べている。すなわち「近代資本主義の精神」についてである。これによれば「新しいスタイル」の企業家が目覚めたのだが、彼らは自己抑制を維持し、経済上・道徳上の破滅に陥らないためには、きわめて堅固な性格が必要である。また明晰な観察力と実行力とともに、とりわけ決然とした顕著な“倫理的”資質を備えていなければ、この確信に必要な顧客と労働者の信頼を得ることはできないし、また無数の抵抗に打ち勝つ緊張力を保ち続けて、企業家としての資格を持つことは出来ない。特にこうした企業家の精神は安易な生活とは両立しがたい。北の地域の冬の長い厳しい風土で生きるのに必要な恐ろしく強度な労働に耐えることが求められる。その中で企業家は厳しく自己を律し、地域の保全と活動の方向を見定めていく。自己企業保全を考えるだけでは生き残りは出来ない。しかしそのような事情を公平に“観察することは決して容易ではなかった”。…とい

うのも、そうした倫理的資質が過去の伝統主義に追従したものととはまるで違った、“新たな信仰”という決意による「生まれ変わりの飛躍が必要であった」⁽¹²⁾のだからである。—すなわちマックス・ウェーバーはすべての生活行動を変える新たに厳しいイデオロギー（行動信条）の変更—をここで語っている。

このような倫理的な信仰生活の合理的な無限の活動から、はじめて無限な利潤が生まれ、さらにその利潤が、次の活動に注ぎ込まれて、新たな利潤が増えていく。この宗教的な内的規範を守り、できるだけ無駄を省き、合理的に地道に生活を営む、節度を知った原則に従う生活の中で、民衆の心情に適合した指導理念が、個人的に神と結びつくという新教の教えがルター派の改革であり、カルビン派の流布へとつながっていった。利潤は正当な神の自分に対する報酬である故、少しも非合理的なものではない。商業的な野心から一山当てる冒険の末得られる、希少価値を高く吹きかけるような、商業戦略的な冒険的商人の欺瞞ではなく、誠実な計算と計画に基づく、堅実な生産活動の結果、利潤が生み出されるのは神の意に沿う当然の結果である。最後まで、あくまで自分の生存の期間は、自己の欲得ではなく、普遍法の裏付けの神が価値基準となる。世界を作った神の合理的世界秩序に沿った誠実な生活をし、自分の能力に応じた仕事に精進することこそ大切なことであった。1517年に始まるルターの新教の倫理観は、中世以来の北歐型市民の生活感情と最も適合する関係であった。

中世末期、伝統的都市が分解して、都市商人と農民が、共動で近世の経済活動の原動力となって行く。とはいえ従来からの北歐の市民モラルが近世を生み出したのではなかった。農民も含めた階級の分解と融合が生じ、産業資本の勃興があって、またこの機運を新教の思想の宗教改革に結びつつ、ブルジョア階級が成立して行った。イギリスの毛織物業の興隆とは、経済的要素とイギリス民衆の宗教的精神が結びついた結果、合理的近代化社会が生み出されたものであった。

しかしルターやカルピンに導かれた宗教改革は、旧教カトリック教会の腐敗（教会制度の形式化や権威主義）に反抗し、全能の神の前に立たされた個人の人間の原罪に対する深い反省と、永遠なる神への信仰のみに頼る、ひたすらなる救済を望む姿であった。

9) 近世一信仰と知性・魂の中に自分を律する基準

信仰と知識を、以前は統一的に捉えようとしたのだが、近世では両者が分岐して、ルネッサンスの運動に見るように、世俗生活に役立つ知識を求めてゆく方向に進む趨勢と、世俗生活に役に立つことをあまり問われないうか、その対極の現実の人間世界の否定という、それ独自の領域に閉じこもってしまうことになっていった。新教の宗教改革は、神の言葉の聖書に還る運動として、当時の社会で生活する民衆の、日々の宗教的敬虔さと禁欲的生存の精神の支えとなり、健全な中産階級の経済活動の推進力となった。⁽¹³⁾

人々は神の前に誠実に行動し、合理的に瞬時の行為を組織化していった。

新教の教えが都市の各教区の構成員に、共同体の安心立命の基盤を提供したことは、旧教との厳しい対決にある地域の民衆個人同士が団結しあい、下からこの新しい教えを支えることになった。個人的存在の集団が、共同体的（同時に多数的に）一教区丸ごと一新しい教えの下に変化をしていった。これが地域から他の地域へと広がって拡大していくことによって、経済的・政治的運動となり、広い地域全体に及ぶ農民戦争にむすびついたのである。「宗教改革とは制度的ローマ・カトリックに対する共同体的なゲルマン的性格の思想的反抗であった」⁽¹⁴⁾

第2章近代ヨーロッパ社会への歩み

1) 近代社会の成立—絶対王政と重商主義そして資本主義社会へ—

その後中世末から近世にかけて都市でおきた変

化は、都市の共同体的性格を個人や個人集団の活動が打破して行く。16世紀後半以後、国家経済の重商主義政策が行なわれるようになる。国民的な利益の視点から、外国資本の排斥や外国からの借金の不払いなど、それまで国際的に王侯貴族に金を貸し与えてきた、国際的巨額金融財閥資本が、破産状態に追い込まれるようになった。これはヨーロッパ金融財閥と、王公貴族を中心とする勢力とが、人民大衆と衝突をする戦いであった。すなわち国民経済の目覚めが、中世的商業資本の限界を示したということになったのである。資本主義は、財閥や古い貴族勢力と結びついた勢力の中からは、生まれない。「北欧では中世都市の共同体的性格を打破していく運動は、最初は非常に小規模な会社あるいは船舶共有組合の活動という共同体的な、しかも都市共同体から完全には遊離しない組合形態をとって商業資本が活動するようになる。」⁽¹⁵⁾

ハンザ同盟（11世紀頃～フランス、フランドル地方、北ドイツ商人とライン特にケルン商人による北海、バルト海沿岸貿易独占の商人組合、12世紀初頭はロンドン、ベルギーのブリュージュ、ノブゴロド、ベルゲンに根拠地のハンザが都市ハンザを形成し、1358年ドイツハンザがフランドルの商業を封鎖するために諸都市同盟の中心となった。以後リュウベックを盟主に14世紀中頃に降デンマーク戦争1368～70年、によりデンマークを制圧し最盛期をむかえた。15世紀以降イギリス・オランダのドイツ人独占貿易への排撃や加盟都市相互の利害不一致などにより、衰退し、1669年リュウベックでのハンザ会議で同盟は終焉したといわれる。）その後のヨーロッパ商業に登場するのはイギリスであった。イギリスが国内産業の毛織物を基軸にして世界に雄飛し、スペインを打ち破ることにより、決定的にイギリスの不動の地歩が固まったと考えられる。そしてそのさきがけとしてオランダとイギリスは、世界に貿易の道を開いていった。その代表的な商業主体が、後に大きな組織に発展していくイギリスの東インド会社（1600年～1853年）であった。イギリスの羊毛業者の全国的統一団体や都市市民の冒険商

人の組合などは、国王の特許状を押し立てて集团的活動を進めていった。重商主義へと向かう時代の流れの中で、王権の強さがこの活動を後押しするものであった。東インド会社は、巨大な特権を国王から付与され、世界の海を支配下に収める尖兵になった。

それまでどこの国の都市でも16世紀から18世紀産業革命の運動の頃までは、さして繁栄を極めるものでなかったが、絶対王政の時代、経済史から見れば重商主義（マーカンテリズム）の時代に、国家的な重要性の高い都市が政治の中心として勢力を持つことになる。それまで栄えてきたハンザ同盟や、イタリア商人達の出先機関としての、イギリス居留地での都市活動は、背後に国家がこれを後押しすることがない都市や商会であった理由により、特権が認められなくなり、消滅していくのである。中世最も栄えたイタリアとドイツは、近世初頭中央集権を持たないという理由により、後退消滅の道をたどらざるを得なかった。スペイン、ポルトガル、オランダ、イギリスが次第にイタリアやドイツを凌駕した国際的国家へと拡大の一步をたどった。

これとともに1492年のコロンブス以来、スペインは新大陸を始めアフリカの喜望峰をめぐるインド新航路の発見、東南アジアへの未知な地域への進出、南アメリカ経由のマゼランの地球規模の大きな商業圏の開拓などの活動をし、従来の地中海、バルト海沿岸の商業とは比べることの出来ない規模で拡大した。当時のスペインは、南米ペルーからほぼただのような銀を採取して、直接東インドに航海し、高価な香料や胡椒を仕入れ、ヨーロッパの食卓に提供した。イタリア商人の仲介利益獲得原理を、スペインはそのまま国家的規模で行なった。国内産業が興らなかつた点にスペインの前途発展は途絶えた。

そういう外側の情勢がドイツとイタリアをふるわなくさせ、ライン川下流にあるオランダやイギリスが近世の立役者に登場してくる。その時にも「やはり新教徒のあの精神が、イギリス新教徒の活発な動きと結ばれあって、イギリス社会を不健全な仲介商業に転落させなかつた。」⁽¹⁶⁾

2) イギリスの躍進とアメリカ独立、フランス革命

さて中世都市が近世都市となるのは、正しい意味で18世紀後半の産業革命以後のことである。その変化の原因となったのが、新しい経済の担い手となって活躍する、独立自営農民であった。彼らは都市産業資本（インダストリー）の尖兵として、絶対王政への反抗運動を通じて、次第に大きな勢力となっていった。政治情勢と経済発展の度合いに応じて、その先端が1688年イギリスの市民革命を実現し、続いて1776年アメリカ独立、1789年フランス大革命、などの新しい政治体制が、代表的な市民革命運動の成果を政治史に残した。やがて1世紀遅れて、ドイツのプロイセンと日本がそれぞれ近代国家への脱皮を試みて、近代の時代の統一国家として名乗りを上げ、世界の政治舞台へと出現した。

3) 遅れた近代化社会の実現の姿・ドイツと日本

ドイツと日本は、イギリスに200年、フランス、アメリカに約100年の時間的な遅れを取り戻そうと、1840年宰相ビスマルクの号令のもとで、ドイツのプロイセンが、また日本は1868年に国家を統一し、明治政府が出現した。しかしドイツのプロイセンも日本の明治維新政府の改革も、旧時代の古い体制要素が個人的活動と合致するという、中途半端な近代化であった。それゆえ社会改革の精神は実際には、ヨーロッパ市民の中に浸透し、自覚的に認識されていた、倫理的・宗教的な個人の自覚としての誠実さや、人間の平等意識、人権の意味を普遍的価値（神）との関わりの中で受け止めつつ共同体意識を中心にすえた、精神ではなかつた。

それはいまだ純粹に近代精神という自我の確立のない、いわば中途半端のプロイセンの、また日本では「和魂洋才的・技術」面でのみの近代化による国家として出現した。この遅れた近代化を強行し、懸命に近代化を唱えた国は、ヨーロッパ市民革命に見られる精神とは、かなり逸脱したもの

であった。

4) ヨーロッパ社会に見る精神的伝統基盤—魂の善導と禁欲

ここで最後に、今後の世界に住む社会人の精神的基礎要諦につきのべたい。

ソクラテスは“魂をよく導くこと”の教えを人類に残した。このことを個人的にどのように受け止めるかである。基本的には理想的国家の理念としてヨーロッパ社会の基礎におかれたプラトンの国家社会のひな型理念の概要の理解が前提となる。しかしそうした思想の基盤を持たない日本のような社会伝統のもとにおいては、今の社会で人間の心を善導するといっても理解困難ではある。しかし今風に語られれば、自律的個人的な倫理が自覚され、相互が広い面で社会正義の実現と調和を理想とし、自覚的に社会全体に広げられていく努力がされるのならば、(近代化が及ぶのならば)、市民各人の意識のレベルの変化に応じて、広範囲な改革は理想に向って皆で協動的に実現することになるのではないか。その際強調される要点とは、マックス・ウェーバーの語るプロテスタンティズム・キリスト教の“現象世界を超越する禁欲的倫理の重大性”、と“宗教の領域の重要性”⁽¹⁷⁾である。これが近代化のための価値基準の目安であるように思われる。この禁欲的倫理観と霊性・宗教性の重要さの2点は社会が前に向かって発展するための重要な指摘であるといわねばならない。そしてこの点を再考することの大切さを、今改めて確認することになったとの思いが強い。

まとめ

ここでこれまでの議論を概略し、この論文の論点を整理することにした。

ヨーロッパの文化を形成する要素として増田四朗氏は都市社会にどのような経済的活動形態の基盤が存在し、精神生活が展開されたのかを考察している。古代ギリシャの都市国家は本質的に消費国家であった。特権市民の貴族たちが、消費生活する国家の都市が古代ギリシャ都市国家の特徴で

あった。この自給自足経済圏では、ある程度の生産量は確保できるが、自給自足以上の生産には限界があった。この古い市民生活の構成基盤と違った原理がもたらされ出現したのが、アレキサンダー大王の築いた、ヘレニズム帝国であった。そしてローマ都市の覇権国家の確立から、帝国へと移行し、ローマ国内都市の中でも贅沢と浪費がなされていった。各地域の中の多神教の乱立から宗教的統一が図られて、キリスト教が国教化されることにより、ヘレニズム社会はさらに躍進し、ローマ大帝国となる。

キリスト教の思想は、市民の神に対する敬虔な心と神の前での平等を前提に、労働意欲を身につけさせ、モラルを行き渡らせた。古代以来の地域氏族制を凌駕し、ローマ法王庁の法王を頂点とする、ヨーロッパ的な地平の広がりをもつ中世カトリック世界を出現させた。

これが新たな時代への前進の大きな要素となった。それとともにゲルマン人の共同体地域でも、主人(君主)と従属家臣団の国家構成意欲が、新しく封建国家の形成へと進んだ。

その後商業と、生産者のギルドの団体組織が新たに出現する。それによって、旧来の封建国家社会に対抗する、新たな市民階級の活動が生じた。ルネッサンスと宗教改革はそうした流れの中から生じた画期的な近代への分岐点となるものであった。西洋人の精神的領域でキリスト教という宗教の力が、ローマ以来のヨーロッパに広がっていたことは、近代社会を構築するため重要な要素であった。

この地盤の上で宗教革新(宗教改革)、あるいは経済生活の倫理基盤ができ、そこから経済を営む者の心構えの転換と、前向き積極的な社会への関連性が生み出された。

この点を大きさにいえば古代国家世界の没落後の、北欧中世からの市民階級の発生として、「ホモ・エコノミクス—経済人—と呼ばれる人間の類型」⁽¹⁸⁾が変わる必要があった。キリスト教はこの役割を十分に果たした。明確な個人個人の市民意識の確立が見られ、住居地域が相互に共同社会

の中でその倫理意識を共有した。

この基盤は現在のヨーロッパ社会においても社会の歴史と伝統の絆として、厳粛性と重厚で毅然とした国民性の心の中に、受け継がれていると感じられるものであると思われる。

その後北ヨーロッパはスペインの活躍からイギリスの躍進へと覇権の変容がおこなわれる。覇権国争いが続いた後、最後にはイギリスが世界の海を制覇し、7つの海を支配することとなった。

そして時代を支える原理が、土地支配の領主たちの手から、職人組合のギルドの結束や、貿易商人の出現へと長い時間の中で移行してゆく。この社会経済と宗教の意識的変化がヨーロッパの共同体としての人々の活動にどのように関係し、支え、前進させたかをこの論文では考察し検討したのであった。

西洋世界の展開で重視し、強調すべきことは、人間の行動原理に宗教、またはある種の心構え、倫理的モラルあるいは経済倫理の類型（信仰あるいは宗教的確信とでもいうもの）が関わっていると認識する必要性であった。

個人の繁栄の基礎または原理として、中世社会、近世社会、現代社会での生活の根幹に、それぞれ内容の異なった共同体における個人の精神と霊性の結びついた労働観、生存の基本的覚悟といえる動機の源があり、それが変化するとき社会は変化し、新しい社会へと移行してゆく。

以上の論述ではこの経緯を西洋社会の変遷に沿いつつ、特に近世の社会変化の歴史的過程に重点を置いて検討した。

このヨーロッパの変遷の流れが世界的に広がって19世紀後半、日本の明治維新を生み出すことになった。当時1843年すでに大英帝国が世界の海を支配⁽¹⁹⁾し、日本の国は前近代的な封建領主（徳川幕府）の存在に、終止符を打つ以外選択肢はなかった。開国は自国内からのことではなく、外からの強制であり、やむを得ざる亡国という危機意識からであった。この改革はヨーロッパのそれとは異なっていた。すなわち旧勢力の封建支配勢力と、個人的才能のある者たちの立身出世意識

が、ちょうど時代の激変の状態を乗り越えさせた。すなわち社会変革と個人の立身出世意欲が同時に進行し、ともかく近代国家の装いを築くことになったのだった。

明治維新の日本では、共同体社会に対する市民の意識の徹底した意識改革がおこなわれなかった。技術領域でのお雇い外人の指導や、日本人の好奇心に基づく伝統的な研究心の熱烈さ、国民の忍耐力と工夫の伝統的風土のゆえ、明治以来の技術革新の近代化は目覚しかった。「和魂洋才」的に、技術のみを導入することで、日本は列強の前に国家としての体裁を取り繕うことを余儀なくされた。徹底した精神の世界での近代化が行われなまま、列強の到来に立ち向かった明治期、大正期、を経て昭和期の世界恐慌に出合う。そしてやがて世界戦争の一方の主役に引き込まれた。古来の社会以来、残念ながらわが国の民衆の生活意識や東洋の意識の根底には、西洋的な平等普遍的に個々の国民が共有する人間性の基本的人権などを顧慮する、いつ誰がどこで語り、示しても誰もが納得できるような普遍的観念とその価値観の前に全市民が謙虚に厳しく、個人として深く自己を省みる個人的反省もなかった。そしてその普遍的観念と価値観に対し、自律的有限者としての倫理的共通意識の国民的覚醒をしようとの自発的動きの発生もなかった。

結果として、国を挙げて外国からの難を排除し続けた明治期以来の、やみくもな富国強兵と近代化の歩みの末、第2次大戦での敗戦の憂き目を見た。その後我が国は、戦後占領軍から民主主義を外部輸入され市民平等となった。しかし大方の市民の心理状況では旧態依然の農業集团的、地域部族的な思考のままの土地支配的国家観から数歩も踏み出せない。あるいは国家共同体への責務と思考をすべて遮断した利己主義的なアナーキズムの言行が見られるように思われる。

幾度もの世界の混乱に巻き込まれ、現在の国際化の嵐の中で苦難の道行を生きている民衆は将来への指針もないままさまよっていくように思われる。今の日本の多くの人々には、個人の心に霊的安らぎを提供する共同体の理想的理念が失われて

しまっているのではないか。これからもその混乱が拡大していく状態の内にあるように思われる。

最後に、これまでのヨーロッパ歴史から指摘されることは、価値目標の重大さではないかと思う。歴史上のヨーロッパの民族間の争いは、過酷この上ないと思われる多くの事実があったとはいえ、いかなる困難の中でも人々の魂の根柢には国家の理想をかかげるプラトンの理念があり、厳しい自律をうながす永遠なる存在者に対する謙虚な自己反省と凝視があって将来に望みを託し、それを乗り越える普遍的な隣人愛や相互助勢の目標が示され、そのある部分を宗教が教え、提供してきているように思う。これに対して今の日本の伝統的宗教には、行く道を失った民衆を思い、前向きに困難を乗り越える勇気と闘志を沸きあがらせる力が果たしてあるのか。こう思いをはせると、どうやら地勢風土の大きな違い⁽²⁰⁾に行き着くようだ。

しかし国際化の世界で今問われているのは、現実の社会の困難をどのように個人が克服するのか、そしてこの共同社会での生活が、何を共通の精神の支柱にして互いに向き合ってゆくのかという「心の支え」の問題が問われているように思う。宗教のない民族は存続が困難となり、滅びるのであろう。あまりに恵まれすぎていた地勢（自然の海に四方を囲まれ、守りさえすれば自国内の中だけで生きられた原始的な考え）での道理を見すえず霊性を忘れ物と金に執着する惰性的な心構えでは、今後到底この国は古代以来のいたわりと配慮の伝統をもった共同社会として存続できないだろう。常識的にも正義と道理を身につけて、一人ひとりがこの国の担い手として協調的に共同体の今後を思いやる、当事者の気概がぜひとも必要ではないかと思われる。

霊性の処理ができない現世的な物質（欲得）思想（唯物論）が、宗教の代わりとなってしまった社会風潮を指摘することは、物質のみをすべてとする魂の行き場のない、希望の持てない、現世主義の世界的状況の時代に、もう一度マックス・ウ

エーバーの宗教領域の大切さを語ることに帰着するとの思いが強かった。理数系の学問では人間の原罪・欲望や利得・利権・等の価値観の領域について、科学的解明や管理は出来ないにちがいない。価値観の領域とは霊性や心と良心の価値の領域のことであり、重く宗教領域の問題（靈魂の安らぎ）に関連があるからだ。科学は欲望や虚栄心などの価値観の領域の基準をどう判断し、どう処理できるというのだろう。科学として医学は決して死を根絶できないのに似ている。人間としてどのように生きるのか、これはソクラテスの「魂への配慮と善導の課題」⁽²¹⁾を語る教えにも関係するものである。魂をよく善導するとは次のように語られる。すべて自然状態にあるものは、欲心こそ善なるものとして、追及するのが人の心の本来の在り方であって、ただそれが法の力で無理やりに平等の尊重へと強制されているにすぎない。何人も自発的に正しい人間であるためには正しい教育が与えられなくてはならない。正義とは本人にとっては個人的には良いものではない。すべての人間は不正のほうか、個人的には正義よりもずっと得になると考えている。だからこそ、その勝手気ままな不正への欲望を「理性」で抑えることが個人ばかりか国家にも必要なのだ。同時に人間の欲望を抑えるためには法や規則だけでは不十分である。なぜかと言えば、法規は外部からの強制的抑制であって、人間の自発的良心の声からの抑制ではないから不十分なのだ。人間は「理性」がなくては本能や欲望を抑えきれないとソクラテスは言う。科学がどれほど発達してもなお、われわれの“いかに生きるのか”という問が常にある。ソクラテスは若者をそそのかした国家反逆罪で死刑を宣告された。この裁判の最後に彼は裁判官たちに向かって次のように述べ別れを告げる。「諸君他日私の息子たちが成人した暁には、彼らを叱責して、私が諸君を悩ましたと同じように彼らを悩ましていただきたい、卑しくも彼らが徳よりも以上に蓄財その他のことを念頭に置くように見えたならば。またもし、彼らがそうでもなくせに、ひとかどの人間らしい顔をしたならば、その時諸君は私が諸君にしたと同様に彼らを非難して、彼らは

人間の追求すべきものを追及せず、何の価値もないくせに、ひとかどの人間らしい顔をしていると言ってやってほしい…」と。金がすべてと思われる資本主義経済の蔓延する今日の時代に、現実の課題として、科学がどれほど発達してもなお新しい問いとして、われわれの“いかに生きるのか”という問が常にある。その実際的決定の仕方、決定の選択が我われの価値判断に託されている。理性を持つ者、品格をもった人間、すなわちデカルトのコギト・エルゴ・スム（思う我と最高者にふさわしい高貴な存在としてここにいる我）に一步でも近づくために、心の底の深い部分の“良心”の声に耳を傾聴するソクラテスの議論への留意の必要があるのかと思う。

なおこの論文で筆者は第2章)の近代社会の成立—絶対王政と重商主義、そして資本主義社会へ—から現代までの部分はおおざっぱな世界枢要国の動きの流れの概要を簡略に述べるにとどめた。また最後に、我が国の現状にも少し言及したのは、戦後の教育に何か欠けていると思うところがあり、その点がヨーロッパの“宗教基盤の存在の重さを顧慮すること“だといえるとも思ったからである。この点にあえて意識を向ける必要があると思われたため、主題のテーマを逸脱する論となった部分もあった。今社会は世界規模での経済的課題に直面している。ヨーロッパの社会に根差した民主主義とは何か、ヨーロッパの文化とは何かとの観点から我が国の民主主義の現状を、自分の認識を整理する上でもこの論文をまとめた次第である。

以上

〔注〕

民主社会成立までの歴史的概観

(1)「国家とは対外的理想的共同体を形成してゆく高遠な理想によって指導され自覚的理性をもった国民によって形成されなくてはならない。確かにそれは租税をとり、盗賊を捕え、詐欺を罰し、貧民を救済する。しか

しその真の目的はそれよりむしろ対内的、対外的に理想的な共同体を形成してゆくことである。社会は醜悪低俗な私益格差の場である。国家はこの社会を同義的な共同体にまですくい上げなくてはならない。国家は軍隊・警察・牢獄・など暴力的用意を持っているが、この暴力はしかし以上の理由により却って神聖なものみなされるのである。」青山秀夫著『マックス・ウエーバー』岩波新書 pp. 28～29

—マックス・ウエーバーは「前近代社会と近代社会」をまったく質的に違った性格の二つの社会の形として考えている。前近代社会は惰性を持つがそれが崩壊して、近代社会が成立するためには様々な都合な客観的条件がそろわなくてはならなかった。つまり近代社会の出現には人間の生活態度の根本的変革（宗教改革による精神的革命）が必要であった。伝統への盲従をすべて拒み、絶えず直接神の前に立って自己の行動を統制し、しかも来世での救済をもとめて社会一般の現生的日常利益増進の努力を集中すべきだ、と説く清教徒の教義を実践する大衆の英雄的行動（主體的な条件）という変革が外部から加わって初めて近代化が完遂される。すなわち大衆が神の意志に従って（神の召命＝天職）の奉仕として、生業を営むこと条件が必要であった。この活動が神意に沿っているならば、その事業は繁栄する。そこに生み出される利子も是とした。その理由は神の意思による事業に市民の努力が提供されることが前提であった。（日本人の心情では、手放して利子追求に明け暮れ、それこそ当然の行き方であると考えて生きていく。それとはまったく異なる生き方をヨーロッパの社会ではしてきたのであった。）こうした清教主義の教義を堅持し、近代ヨーロッパの人々はつつましく神の前で誠実に実践していった。清教徒大衆の生活に見る実行が、外面から資本主義の社会を形作り、近代資本主義社会の基礎を確立し、神の命ずるところを堅持し、理性と信仰に立脚した市民たちが新しい社会を築いていったのである。」—青山『マックス・ウエーバー』pp. 28～44、また「宗教改革こそが教会や権威の観念を持って、社会的諸組織を内面的かつ強制的に建設する原動力となった。」—ートレルチ著・内田芳明訳『ルネッサンスと宗教改革』岩波文庫 p. 58

(2) 増田四郎著『都市』ちくま学芸文庫 p. 66

(3) 貴族階級政治から市民への移行はBC7世紀から6世紀の頃であるが、恐れを知らない野望を抱いた人たちが達成したのである。彼らは領主達から権力を奪い取り、ギリシャ世界を変える“僭主”政治を打ち立てた。最後には、民衆自身が政治の実権を握った。専制者が民衆主義に座を譲ったのである。少数の者達による富の獲得は政治形態としての貴族政治を出現させた。そして時代の経過に伴って、寡頭政治の成立へと進むのである。社会状況が変化してゆくにしがって、市民階層が生まれ、特権階級の指導を拒絶するようになっていく。A History of Philosophy - Written By Frank Thilly: Holt, Rinehart And Winston New York 1963 pp. 10～15

Frank Thillyはソクラテスの生きたソフィストの時代のアテネの状況について現代社会でもよく了解できる仕方語っている。その文章の一部をここに少し訳

出して紹介する。

思想の進歩

哲学は神統記の時代と宇宙創造説以来、長足の進展を見せた。世界とそれまでの生命の古い概念は、根本的にその影響を受けて変えられていった。その変化の範囲は神々の溢れる宇宙あるいは神秘的な魔術的な神秘思想のようなものと、アトム論の機械的な考えによって簡潔に示される変化として、よく理解できる。しかし、自由な吟味の精神は、哲学学派に限られたばかりではなく、必然的にその他の領域の思想にも浸透していった。そこでは新しい考え方が古い考え方を退場させていった。私達はアエスキュロス (B.C.525 - 456) の劇の詩の中にその変化を見て取るし、ソフォクレス (496405BC) やエウリピデス (486406BC) にもそうである。彼らの生命や宗教の見解は、批判精神や熟慮によって研ぎ澄まされ拡大されている。私達は歴史家や地理学者達の記録の中にそれを見出すのである。古い言い伝えによる説話や迷信、それは歴史のこれまでの常識と思われて伝えられてきたものが信用されないこととなったのであり、ヘロドトス (480 頃) は歴史の批判的な学習のための仕方を固めたし、それに乗っ取って、ツキジデスが最も優れた古典史を物す代表者となった。

医学においては古い空想的な考え方や治療法は同業社の指導者達によって排除されて、自然と人間の知識の必要を感じ取られて、哲学者達—その多くの者達は実は物理学者であったのだが—、物理的な学説が治療の際の方法に取り入れられている。ヒポクラテス (約 460BC) の名前は科学的医療学の方においてギリシャが達成した、画期的な前進の代表者として名が知られている人である。物理学者達の諸活動は観察と実験の重要性を示すことにより哲学の学生には偉大な価値あるものと成っていった。

私達は今や偉大な思想体系がそこで停止することになるギリシャ哲学の歴史のある時代に来た。ある思想家達はそれまであった学派の説明を継続するし、他の人は折衷主義の装いを取り、初期の哲学者達の説を後期の巨匠達の哲学と結びつけて論じる。ある人は医学の学派によって探求された自然科学的な研究に注意を向け、他の人は道徳や法律、そして政治の基礎を警醒する精神的基準の研究に興味を示すのであった。調査の熱意は厳しいので、ありとあらゆる問題にかかわり、国の目的や起源に及ぶ問い、行動の原則や宗教芸術、教育の原則に及ぶ問いを含むのであった。高度に特殊化された入門書物が余りあるほど産み出された。食べ物の料理の仕方から芸術の創作のやり方、戦争を続行するための散歩の仕方、に至るまでのあらゆる人間活動にとっての規則が纏められた。これらの努力する哲学の中に潜在的な影響力があった。独立的な反省と批判力の精神、それゆえギリシャ哲学の始まりの性格は、学問のあらゆる分野に広がっていたし、思索的な広範囲の思想のために道を準備していた。しかし人間の心は誤った方に向かっていき、そのクライマックスに至る前に、多くの盲目的な袋小路に自分を見失ったのであった。我々は紀元前 5 世紀の四半世紀の間に哲学の運命を述べようとした。それは一般にギリシャの歴史

と文明にとっての非常に重要な世紀なのである。

ギリシャの啓蒙

我らは自由と個人主義へ盛り上がりつつあった機運を、ギリシャの人々が政治的、道徳的、宗教的、哲学的に発展させてきたことを観察してきた。人間の生き方や社会に対する制度は既に初期の詩歌やかすかにホメロスの中で、そしてヘシオドスや BC.7 から 6 世紀の詩歌に次第にはっきりと強調されてくるのだが、感じられてきていた。これらの人々は彼らが生存していた時代の行いや行為の点に考えを深く思いめぐらし、社会や政治の制度、宗教的理念と実践、根源的なものや自然、そして神々の行為について思い巡らせていた。彼らは神学や宇宙論の中で神の神聖な更なる考えについて発展させ、哲学の到来への道を準備したのだった。BC.6 世紀の哲学について独立的志向への傾向がほぼひとり立ちできるように見えた。この時代の間に、そして BC.5 世紀の最初の前半の世紀に自然科学と自然哲学は時代の趨勢となった。探究心は物質的事物の世界へと向かっていく。宇宙の意味を理解する努力が為されている。組織が次々に宇宙の謎を解くために提案されている。関心の主要な問題は世界とその振る舞いである。自然界における人間の地位は本質を純粹に志向する点に達した時点で決定されるのである。BC.5 世紀頃のギリシャ人の政治的経済的知的な経験は、彼らの哲学者達を性格づけていた啓蒙精神の展開へと高度に有利に働いたのである。BC.500 - 449 のペルシャ戦争は、アテネを海の女王、世界覇権国となし、ギリシャを経済、知識、芸術の中心の場所にした。詩歌、芸術、哲学者達は今やギリシャの門をくぐり、その豊かな市民達をもて成し、教養を提供する手助けをした。豪華な建物郡や銅像が都市を飾り、たくさんある劇場は十分満足をした人々の拍手のみちあふれていた。5 世紀頃の後半の時期に市を囲む城壁の中に住んでいた有名な人々を思い起こしてみれば、ペリクレス、アナクサゴラス、ツキジデス、フィジ阿斯、ソフォクレス、エウリピデス、アリストファネス、ヒポクラテス、ソクラテスなどが上げられる。—我らはペリクレスによって演説された、アテネはギリシャにとっての学校であったという誇示の偉大なあの演説で十分に理解することができる。

大変な経済的变化と物事の新しい秩序によって促進された民主主義的な制度は、独立した志向と行動への更なる刺激を与え、これらと共に相まって力と物質に対する欲望が更に富、名声、文化、能力、そして成功という力を集積した。宗教の伝統的な考え方、道徳、政治学、哲学、科学、芸術などは批評の対象であった。古きもろもろの根拠は吟味され、多くの場合に引き裂かれた。拒否された精神は大陸奥地へと去っていったのだ。新しい研究主題の教授のための要望が強くなった。人々を説得し納得させる技術に優れた人々にとって、社会で活躍できる輝かしい分野が開かれた。つまり修辞学、雄弁術、弁証法の弁論などは実践的必要となった。

われらが述べてきた時代は、啓蒙の時代であって、近代における 18 世紀の啓蒙記に匹敵するものである。生じた心の態度は個人主義を促進させざるを得なかつ

た。個人はグループの権威から離れて、みずからのために行動を起こし、昔の伝統とは関係なく自分独自の考えに基づいて、自分の救いのために行動した。この批判的な思考の傾向はギリシャ文化の発展に対する極めて貴重な貢献であったとはいえ、それはあまり長くは無かったが、あいまいでつまらぬ事をあれこれ言う点で最高潮に達したのだが、誇張された形態をとるものであった。そのほかの点では、それは知的、倫理的に主観主義と相対主義へと退廃していった。それは真理だと私が思うことは真理であり、それは正しいと私が信ずることは正しい。ある人の考えていることは他の人の考えと同様に良いものである。ある人の行動は他の人の行動が正しいと同様に、正しいものである。こうした環境においてはどんな人の考えもさして尊敬に値せず、理論的領域では懐疑主義が幅を利かせ、実践的な問題に対して利己主義の教説が幅を利かせていたような事は驚くに値しない。誇張されているのであるとはいえ、しばしば新しい行動の退廃した姿を浮き彫りにしているツキジダスの一句が引用される。

普通の言葉の意味は人々の気分に変えられた。最も無鉄砲の空威張りが最高の友人と考えられた。思慮ある人や節度ある人は卑怯者のとる態度だとされた。理性に耳傾ける人は何の役にも立たないばかりであった。人々は彼らの暴力と無遠慮さに比例して信頼された。そして商売で知略をもって相手をだますくらいに聡明でない陰謀者は、人々にはあまり話題にされなかった。こうした裏切りの原因を誠実に取り除こうとする者はその仲間を裏切る者とみなされた。誓約に関しては誰一人彼らが求められた以上に、ある一定の時間を保持されねば成らない事となっていたとは想像すらしなかった；すなわち実際もし敵を言葉巧みに信用させることが出来れば、それによって彼を管理し、敵を全滅させる喜びが付け加わったのだったから。

アリストファネスはその喜劇の中で、新しい文明がもっていた人にはあまり見せられないような側面について示し、ペンをして言わせている。

古代の秩序は当時の時代には非常に緩んでしまっていた。金持ちは怠け、贅沢三昧であった。貧しい者達は反乱を起こすような状態であった。若者達はますます高齢者達に対して大柄な態度を取るようになっていった。宗教があざ笑われた。全ての階層の者達が金に対する欲望を抱き、感性的欲望のためにそれを費やすことで活気図けられた。これは当時のその時代の豊かさを求める子供の個人的に自由な考え方での一社会状況の一側面である。

他方の側面では我らはよき昔の時代の代表者としての保守主義者を見るが、彼らは新しい考え、新しい教育、新しい道徳というよりはむしろ新たな悪徳に対立する。というのは理知的な追求は若者を半宗教的半道徳的に導くようにする。すなわち、若者を祖先とは異なった者とするように思われた。そして、絆や生命すら破壊してゆくものに結びついているように思われたのである。

ソフィスト達

新しい風潮はソフィスト達によって代表されていた。その言葉は本来的には賢明な積極的な意味を持つ言葉なのだが、当時は政治家を志す若者達に思考と弁論の術をお金を取って指導する、旅をして廻る専門的教師について語られる言葉であった。しかしその名前は次第にある意味金を取ることで、また保守的な人々の要素に愛想を付かした後期になっての過激主義のものを非難する言葉の意味するようになっていった。彼らソフィスト達は選ばれた任務と考えて、病的な目的を抱いてこの仕事に心血を注いだのであった。プラトンによりプロタゴラスは若者に対して「もしわたしと付き合っていけば君が育てられたよりもズット優れた人になって帰るだろう」といったと述べられている。

そしてソクラテスがどのようにしたらそれが実現するかを尋ねると、ソフィストは「もし若者が私の所で学んだら、個人的公的な仕事を最良に実現できることになるのだ」と答えた。

若者が活躍するためには弁証法、文法、比喩論、雄弁術を従前に学ぶことが不可欠であった。ソフィストたちはその科目を重点的に実践的に教えた。しかし彼らは無意識に道徳と政治に集中し、道徳的、神学的な研究の領域の土壌を破壊した。彼らは関心をそれらの領域に集中させ、それによって倫理学と政治学体系全般に対して強烈な揺さぶりをかけたのだった。当時の道徳的情熱は衰退し、後期のソフィストたちのある者たちは、彼らが教える学生を有能なものとするためにしばしばどのような手段を使っても成功さえすればよいという極端にまでなっていた。彼らの教授の目的はいまやいかに敵対者をまことしやかに不正な仕方でする屈辱させ、より良い理由で相手を悪者に仕立てるか、あらゆる論理的揚げ足取りによって相手を混同させることであった。確かにソフィズムあるいは詭弁という語は、ソフィストをばかいた詭弁（こじつけ）という人を惑わす者という意味をもつようになったのである。

- (4) 中世都市は何よりもまず商工業に従事する市民の集団の場であり、古代のような消費者の都市ではなかった。ここで初めてホモエコノミクスなる人間の類型が小規模ながら都市の内部に発生した。このことはこれまでとは根本的に違った社会構造を予想するものでなくてはならない。 増田『都市』p. 91.
- (5) ルネッサンスは社会学的には完全に非生産的である。それは非常に限られた狭い範囲内において無政府主義的かつ貴族主義的であるが、それ以外についてみれば完全に独立を失って、国家や教会の既成勢力に寄り掛かるものであった。それは教養貴族政治とサロンを作り出すばかりでなく、およそあらゆる権力に臣従を誓うものである。トレルチ・内田『ルネッサンスと宗教改革』p. 38
- (6) 増田『都市』pp. 100 ~ 101)
- (7) 商人たちは暴動の後始末の時一つの法理論を持っていた。皇帝との直結という法理論を打ち出し、次第に諸侯の支配力を弱め、封建領主は農村を支配すること、都市の住民は自分たちで自分を守る事が出来るとの特権を長い間かかって暫時獲得していくのであった。

…都市城壁を外敵から守る、軍隊を持つ、都市城壁を築城する、みな費用負担がかかってくることであるが、市民の経済力によりこれを受け止める。市政運営の役人の選考権、下級裁判行使権、貨幣鑄造権、市税徴収権、度量衡の監視権、などの権限が皇帝から許諾されていった。増田『都市』p. 104

- (8) 増田『都市』p. 108
 (9) 増田『都市』p. 124
 (10) 増田『都市』p. 139
- (11) 資本主義的成功の条件に自分の生活を適応させないものは、没落しないまでも、繁栄することはない。しかしこれは、近代資本主義が勝利を得て、古い足場から自己を解放した時代の現象である。形成期の近代国家権力と資本主義は結託することによってはじめて古い中世的経済統制の諸形態を破砕しえた。ちょうどそのように、宗教的権威との関係においてもおそらく、そうしたことが起こりえたであろう。マックス・ウェーバー著・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 pp. 82～86
- (12) ウェーバー・大塚『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』pp.79～80
- (13) マックス・ウェーバーはこの態度には「外的権威に服するのではなく、自分の魂の中に自分を律する基準と権威を求め、常に神が自分の行為を見ておられると感ずることによりいつでも誠実に働き続けた」という。ウェーバー・大塚『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』p. 20
- (14) 増田『都市』p. 145
 (15) 増田『都市』p. 155
 (16) 増田『都市』p. 160
 (17) ウェーバー・大塚『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』pp.376～378
 (18) 増田『都市』p. 91
 (19) アンドリュー・N・ポーター著・横井勝彦・山本正訳『大英帝国歴史地図』東洋書林 pp. 123～127を見れば、既に1848年イギリスの世界植民地支配の実情は、現在のアメリカ軍規模の軍力で地球を覆い、その支配力のすごさを世界に示していることが分かる。当時の時代の大部分の日本国民はこのような状況であることを何も知らされることがなかった。“井の中の蛙”鎖国の中での世界情勢に盲目状況の中、下級武士が明治維新を実現させた。そして近代化だけを目標として、和魂洋才を実行した。時代は明治から大正・昭和へと進み、さらに第2次大戦の混乱と原爆の惨禍を経て、和魂的思考も忘れ、与えられるだけの情報を信じ、現在映像文化（テレビ）の中でさまよう民となってしまったようである。
- (20) 和辻哲郎著『風土—人間学的考察—』岩波文庫 pp.29～144、特に第二章知性風土の三類型（1. モンスーン、2. 砂漠。3. 牧場）を参照。世界は第2章で扱われている砂漠から現れたユダヤ教、キリスト教、イスラム教の3宗教の広がり経過の後、宗教戦争しながらの状況が繰り返されている。これら宗教がなぜこの過酷な地域性の生活の中から生じてきたのかを和辻哲郎の著作は理解しやすく説明している。取り分けイスラエル族の特異性について指摘して、「砂漠的人間の功績は人類に人格神を与えたことにおいて絶頂に達する。

部族の全体性の中に神的能力が生きている。この力によって部族の存在と生育が可能となる。—この信仰が出发点であった…部族の全体性を神と感ずることは一般に原始宗教の特徴であって、砂漠にのみ限るわけではない。しかし部族生活が、単に原始的たるにとどまらず、とくに砂漠的生活様式として意味を持つと同じく、部族神の信仰も砂漠生活の必然性によって、他のいずれの場合よりも強烈である。その特異性が部族神を人格神たらしめた。」すなわち宇宙を計画的に創造した神とは「“自然と対抗する人間”の全体性が自覚されたものであり、したがって自然の力の神化の痕跡は含んでいない。自然は神（観念）の下に立たねばならぬのである。」(pp.68～71) —この神に選りすぐられた部族意識の延長線上で、ユダヤ人といわれる人々が、今世界のあらゆる領域で潮流を造りだし、世界の動行を握っていると語られる。

- (21) プラトン国家編 P P、109～173においてプラトンの靈魂をよく善導するとは次のように語られる。すべて自然状態にある者には、欲心こそ善なるものとして、利得名利を追求するのが人の心の本来の在り方であって、ただそれが法の力で無理やりに平等の尊重へと強制されているにすぎない。何人も自発的に正しい人間であるためには正しい教育が与えられなくてはならないのである。正義とは当人にとっては個人的には良いものではない。すべての人間は不正のほうだが、個人的には正義よりもずっと得になると考えている。だからこそ、その勝手気ままな不正への欲望を「理性」で抑え教育を通じてそれを教える必要がある。そうしたことは個人ばかりか特に国家の指導者にも必要なのだ。同時に人間の欲望を抑えるためには法や規則だけでは不十分である。なぜかと言えば、法規は外部からの強制的抑制であって、人間の自発的良心の声からの抑制ではないから不十分なのだという。人間は「理性」がなくては本能や欲望を抑えきれないものなのだソクラテスは言うのである。ドイツのイマニュエル・カントは「良心」こそ人間の「実践理性」の核芯だとしている。ヨーロッパには、ヘレニズムとヘブライズムの文化的伝統が基板となっている。つまりヘレニズムの文化的遺産のプラトンの国家論と、ヘブライズムの遺産であるキリスト教文化は、今の時代に至るまでヨーロッパにおける社会生活における精神的基礎をなし、政治理念の理想を伝える理念として人々の心をとらえ、学ぶべき多くのことを伝えている。

参考文献

- 1) マックス・ウェーバー著・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』岩波文庫 2009.9.4.
- 2) トレルチ著・内田芳明訳『ルネッサンスと宗教改革』岩波文庫 1989.9.5.
- 3) 増田四郎著『都市』ちくま学芸文庫 2007.3.10.
- 4) 青山秀夫著『マックス・ウェーバー』岩波新書 2005.10.16.
- 5) フランクリン・L・パウマー著・鳥越輝昭訳『近現代ヨーロッパの思想』大修館書店 1992.7.10.
- 6) A History of Philosophy - Written By Frank Thilly: Holt, Rinehart And Winston New York 1963
- 7) アンドリュー・N・ポーター著・横井勝彦・山本正訳『大

英帝国歴史地図』東洋書林 1996.

- 8) 和辻哲郎著『風土—人間学的考察』岩波文庫 2007.
- 9) プラトン全集 11 クレイトポン 国家編 岩波書店 1981.
- 10) プラトン全集 I ソクラテスの弁明 29D-E 岩波書店 1981.